

Special Essay

世界は一冊の本

環境医学講座
石竹 達也

身分証明書を必要としない旅、それは読書である。早朝でも深夜でも晴れていても雨が降っていてもかまわない。部屋から一步も出ずに好きな本を開き、ページの上に再現される世界を自由自在に旅する事ができる。

私が本の世界の楽しみを知ったのは大学生になってからだろうか。マンガ本や地理関連の本が好きで読んでいたが、文学作品なる物は夏休みの宿題の読書感想文のために読んだぐらいだ。それでも何も不自由は感じてこなかった。ただ、読書好きの知人の話を聞いていると、何か考え方の幅、人としての重みが自分には不足していると思うようになってきた。もちろん本を読む暇もなく、一生懸命仕事をしてきた人たちの話は体験談として言葉の重みを感じる。

親になってみると、子供には読書好きになって欲しいと願うようになった。親が本を読んでいる姿を見ていれば子供も自然に本を読むようになるらしい。ところが、子供たちは私の心配をよそに、絵本の世界に魅せられたようだ。読み聞かせをしてもらうことが大好きになってしまい、私の不在の夕食時はいつも母親に本を読んでもらっていたようだ。「今日、夕食一緒に食べられる。」と子どもたちに聞かれ、「もちろん」と私が言うと、なんと不満顔。「今日読んでもらうところがおもしろくなりそうなのに。」淋しい気持もするのだが、子どもを夢中にする本の世界。創造性、想像力がどんどん子供の心に培われているのだろうと嬉しくもあり。子供たちは読み聞かせしてもらうことから、読書へと繋がったようだ。本の一番のおもしろさは、その作品の世界に入る込むことである。一度本の世界にひっぱりこまれる興奮を感じてしまったら、人はずっと本を読み続けるものらしい。子供はまさにその通りだと思う。私も子どもの頃に本の世界の楽しみを知っていたらもう少し心豊かな人間になれたかもしれないと後悔している。

そんな私に少し元気を与えてくれた詩、『世界は一冊の本』（長田弘）だ。「本を読もう。もっと本を読もう。もっともっと本を読もう。書かれた文字だけが本ではない。日の光り、星の瞬き、鳥の声、川の音だって、本なのだ。本でないものはない。世界というのは開かれた本で、その本は見えない言葉で書かれている。（中略）」とあった。この詩に出会い、読書することの奥深さを知らされた。読書ということに何もためらわず、素直に「世界は一冊の本」に浸る秋を楽しみたい。

